

宗教心理学研究会ニューズレター

第4号 2005.9.12

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

特集: 科研費研究プロジェクトに関わって -----	1
科研費研究プロジェクトに関わって -----	西脇 良 2
科研費研究プロジェクトに関わっての感想 -----	河野由美 4
宗教心理学者・上野隆誠 -----	河東 仁 5
科研費研究プロジェクトに関わっての意見、感想 -----	高木宣行 7
科研費研究プロジェクトに参加して -----	中野美加 9
事務局からのお知らせ -----	10

特集: 科研費研究プロジェクトに関わって

本年度、宗教心理学研究会会員有志による、科研費補助金[基盤研究(C):企画調査]が採択されました。この科研費研究プロジェクトは、社会心理学、発達心理学、臨床心理学、そして、宗教学、哲学、教育学、生命倫理学、医学、看護学、社会福祉学などの学問領域において、宗教心理学に関する多くの研究の蓄積を有する研究者が参加し、宗教心理学の発展のために共同研究を実施することを目的としています。また、この共同研究を通じて、宗教心理学の学問的体系化をはじめ、今後、社会に研究成果を還元してゆくために、どのような研究が現代日本社会の中で求められているのかを明らかにしていきたいと考えています。

今号では、「科研費研究プロジェクトに関わって」と題しまして、プロジェクトに関わっているメンバーに執筆していただきました。5人の執筆者がプロジェクトに関わることによって感じた様々な事柄を知ることにより、今後新たに展開していく研究会活動のヒントが得られるのではないかと確信しております。

科研費研究プロジェクトに関わって

西脇 良(南山大学)

昨年の秋、本研究会会員である河野由美先生(藍野大学)の呼びかけのもと計画、申請されていた科研費研究プロジェクトが、多くの会員の協力により、平成17年度科学研究費補助金(研究テーマ「宗教心理学の体系化に関する研究 宗教心理学の社会的貢献にむけて」)として採択されました。呼びかけに参集して下さった多くの会員の皆さまにあらためて感謝を申し上げたいと思います。筆者は今回プロジェクトの研究代表者を務めさせていただいておりますが、実務面・研究面ともに全精力不足であり、皆さまにご迷惑をおかけしております。と同時に、いろいろなことを勉強させていただく貴重な機会を与えられたことを深く感謝申し上げます。

さて、本稿では、今回のプロジェクトの研究目的、研究内容、メンバー、について、本年4月に提出した「補助金交付申請書」の記載内容を参考にしながら、簡潔にご紹介したいと思います。

1. 研究目的

宗教に関する心理学的研究は、その必要性が認識されつつも、とくに日本において活発さに欠けていることは否めません。こうした現状から脱却すべく、2003年の夏、松島公望さん(現事務局)の尽力により、「宗教心理学研究会」が発足し、研究会としての活動が開始されました。

宗教心理学研究会が取り組むべき課題は多々ありますが、とくに、(1)宗教心理学の学問的体系化、(2)研究者間の交流と情報交換、(3)研究を通しての社会的貢献、の観点から、より一層の努力が払われねばならないように思います。

こうした現状をふまえ、本研究プロジェクトでは、上記3観点にたった研究課題を設定しました：

(1) 宗教心理学の学問的体系化：

研究上の諸概念を整理、国内外の関連文献の収集整理、宗教心理学的観点から現代社会の諸問題を整理、先行研究のデータベース化、など。

(2) 研究者間の交流と情報交換：

宗教心理学研究会の研究発表会の企画運営、ニューズレターの編集発行、「日本宗教心理学学会」の設立準備、など。

(3) 研究を通しての社会的貢献：

予備調査の実施、ホームページの整備、ホームページ上での研究成果公開、など。

これらの研究課題に取り組むことによって、現代日本社会に寄与しうる研究領域としての確立を目指すことが、本研究プロジェクトの目的です。

2. 具体的な研究内容

研究目的に掲げられた3つの研究課題は、その具体化にあたり、以下の7つの研究チームに分かれ、分担実施されています。

(A) 文献研究チーム

国内外を問わず現代社会が抱える諸問題について、宗教心理学の視座から関連があると思われるテーマを収集し、各テーマについての研究レビューをおこないます。7月末現在、約100のテーマを収集、さらに10の作業チームに分かれて研究レビューがおこなわれているところです。

(B) データベースチーム

宗教心理学に関する国内外の先行研究論文

のデータベース化を行い、宗教心理学研究会のホームページを整備したうえで、キーワード検索が可能なデータベースを公開する予定です。

(C) 予備調査チーム

日本人の宗教性とスピリチュアリティとの関連、生や死に関する観念・態度(終末期医療、脳死臓器移植、対外受精、遺伝子操作への態度等)との関連、宗教等に対するニーズ、などをテーマとする予備調査を実施します。8月末現在、2つの予備調査が実施されました。

(D) 研究成果発表チーム

本研究プロジェクトの成果の一部を、2005年度日本心理学会全国大会ワークショップで発表します。

(E) ニューズレター編集発行チーム

宗教心理学研究会のニューズレターを編集発行します。

(F) 企画調査研究成果報告書編集発行チーム

「宗教心理学の体系化 宗教心理学の社会的貢献にむけて」と題する企画調査研究成果報告書を編集発行します。

(G) 日本宗教心理学学会設立準備チーム

「日本宗教心理学学会」設立に向けて会則等の討議をおこなう予定です。

以上のようなチーム分担体制で、着々と研究が進められています。研究成果は最終的に、「企画調査研究成果報告」にまとめられ、2006年7月頃に、公表される予定です。

3. 研究メンバー

現在の研究組織は15名より構成されています(敬称略・順不同):

金児曉嗣(大阪市立大学)、ミカエル・カルマノ(南山大学)、河東 仁(立教大学)、安藤泰至(鳥取大学)、ジュマリ・アラム(山口大学)、河野由美(藍野大学)、堀江宗正(聖心女子大学)、杉山幸子(八戸短期大学)、加藤 司(東洋大学)。(以上、研究分担者) 高橋正実(米国イリノイ州ノースタン大学)、松島公望(東京学芸大学大学院)、高木宣行(龍谷大学大学院)、松田茶茶(神戸学院大学大学院)、中野美加(神戸女学院大学大学院)。(以上、研究協力者) 西脇 良(南山大学、研究代表者) 合計15名。

今回の研究プロジェクトは、科研費としては単年度の研究ではありますが、今後も引き続き、持続的研究プロジェクトとして位置づけられることが期待されています。ご関心をもたれた方は、お気軽に宗教心理学研究会事務局までご連絡くださいませう、ご案内申し上げます。また、上掲の研究課題以外にも、新しい研究テーマなどがありましたら、どんどんお寄せいただければ幸いです。メーリングリストなどで話し合っていければ、と思います。一緒に、宗教心理学研究会を盛り上げてまいりましょう。

科研費研究プロジェクトに関わっての感想

河野由美(藍野大学)

この度、高い倍率にもかかわらず科研費が採択され(平成16年では採択率10.9%)、事務局松

島さんや西脇さんを中心とした、これまでの宗教心理学研究会活動が評価された結果であると、

非常に嬉しく思っております。ただ、科研費が採択され、いざ活動が開始されてみると、いろいろな問題につきあたり、正直なところ困惑しているのが現在の私の状況でもあります。この私の抱く困惑は、一つは科研費申請提案者としての研究計画書立案、申請過程に関することに起因しています。研究計画書立案においては、メンバー間で事前に十分討議し合い、コンセンサスを得ておくことが、研究活動を順調に進めるためには是非必要であると思われれます。しかし今回の申請では、メンバー間で十分に研究計画に関して討議をせず、短期間で強引に申請書を提出してしまった経緯があります。そのことが、実際に科研の研究活動を進める中で、大きな混乱を引き起こしてしまっていると思います。中でも、「宗教心理学の社会的貢献」に関しては、メーリングリストを通じて、率直に懸念や違和感を多くの方が感じている事を知りました。研究計画書立案時には、研究成果を公開すること、データベースの整備・公開等、研究会活動の成果が研究会メンバーだけでなく、広く一般の人にも活用してもらえるようにとの意図もあり「社会的貢献」という言葉を用いました。しかし、宗教のプラスの効用のみを明らかにするという意図に捉えられたのは、私の説明不足や思慮のなさが起因しており、いまだ科研メンバーの抱く懸念を払拭できずにあります。

そして研究活動計画内容に関しては、1年間ではとても完結できるものではなく、数年は要する内容のもので、多くの科研メンバーの方々が研究活動に負担を感じているのではないかと推察致します。第1回の科研費会議でも発言させて頂きましたが、この1年で研究を完結すると言うよりも、できる範囲内で実施して、今後の活動として引続いていく、という方向で良いのではない

かと私は思っています。宗教心理研究会活動はこの1年で停止するわけではなく、今後も活動は継続されます。科研ではその導入になれば良いとの思いで計画書を立案致しました。

しかし、今回の科研費申請においては、申請準備過程での不備は否めないと思います。科研費申請までに、十分な時間をとりメンバー間で討議をしなかったことが、結果的に混乱や困惑を招いてしまいました。申請提案者として責任を痛感し、ご迷惑をおかけしたメンバーの方々には心よりお詫びを申し上げます。

また、異なった専門分野の研究者と共同研究を行うことは、予想以上に大変な面も多い、というのが活動に携わっての正直な感想です(それは、一重に私の不勉強によるものでしょうが)。例えば、予備調査においても、「宗教」を中心に研究するのか、「宗教」(現象・態度)を一つの変数として研究するのかによっても、研究のすすめ方は大きく異なります。宗教学の立場からすれば、まずは「宗教」というものを文献研究等から明確に定義してから事を運ぶ、私の立場(社会心理学)からすれば、宗教の定義というよりも、宗教と関連すると思われる事象や態度が人々の心理にどのような影響を及ぼすのかに関心があるため、予備調査などではまず実施してみることからはじめます。ある意味、アメリカを引き合いに出すまでもなく、こうした宗教学サイドと実証的心理学サイドの視点の相違は予想されることでもあります。私は個人的には、今後の宗教心理学研究会の活性化を図っていくためには、こうした視点の相違は避けては通れず、乗り越えてゆかなくてはならないものだと思っております。またそうした、視点の相違・多様性が新たな発見や学びに繋がると思っています。従って、多くの困惑や大変さを感じながらも、貴重な学びを得てい

るといのが今回の科研に参加させて頂いての正直な私の感想です。

なお、今回の科研費申請の主目的は、宗教心理学研究会の活性化でした。今回の科研費申請過程では多くの不備がありました。研究会メンバー間で更なる研究活動に発展させて頂ければ、目的は達成されたものと思っております。前回のニューズレターにも記載致しましたが、会の活動においては、激流や急流になるのではなく、適度な流れを保った清流になることを祈念致しております。

宗教心理学研究会を通じて今後更なる共同研

究を申請していく上で、私のような失敗を繰り返さないためにも、失礼を承知で今回のニューズレターでは正直な私の感想を記させて頂きました。モノローグとしてご放念頂けると幸いです。そして、申請準備過程での多くの不備にもかかわらず、快くご尽力下さっている、研究代表者の西脇さん、事務局の松島さんをはじめ、科研費研究プロジェクトメンバーの方々には心より御礼を申し上げます。

宗教心理学者・上野隆誠

河東 仁(立教大学)

日本における宗教心理学の大先達^{せんちゆう}に、上野隆誠^{りゅうせい}(1896～1943)なる人物がいる。主著は『宗教心理学』東洋図書(1935年)、および『宗教心理の本質』理想社(1941年)である。小稿では、紙幅のゆるすかぎり彼の研究を紹介するなかで、古典的な宗教心理学の一端に触れてみたい。

まず上野が目指そうとしたのは、客観科学としての宗教心理学の樹立である。そしてそのためには通常の心理学に依拠せねばならず、主観的・形而上的・哲学的な論究を入れることは避けなければならぬと主張する。

そうした上野が直接的な考察の対象としたのは、回心現象である。ただし彼の研究スタイルの特徴は、実地調査ではなく、あくまでも欧米文献の広範な探索にあった。だがそうしたなかでも回心を青年期に特有の心理現象としてでなく、広く人間心理全体のなかで考察することで、独自の

見解を樹立しようとする。そのために彼は、狭義の回心から広義の回心へ、キリスト教的バイアスの排除、情操論批判という三つの立場を打ち出す。

クラーク学派では、漸次的な回心よりも突発的な狭義の回心に重点が置かれている。だが回心の本質は「人格の変化」にあり、たとえ突発的なものの場合でも、その後漸次的な意識反省の過程が続くゆえ、いかなる回心も漸次的な経緯をたどるはずである。そしてさらに、回心を、青年期の特殊現象でなく広く人生全体に見られる現象として位置付け、「宗教信念開発」「宗教的覚醒」などと呼び変えるべきである。

クラーク学派の雄スターバックは考察の材料をキリスト教徒の若者に求め、回心の主たる契機を「罪悪感」に見出した。しかし罪悪感、彼等が受けてきたキリスト教教育に起因するものであり、青年期一般に特有の「不完全感」のキ

リスト教的な現われ方にすぎない。

だが「不完全感」という感情・情操にしても人類普遍的とはいえず、文化的な慣習のなかで形成されてくるものである。つまりこうした「罪悪感」「不完全感」の背後には、実はより根源的なものとして、「本能」が存在する。ただしここで言う「本能」とは、危機的状況を打破しようとする動因ないし欲求を指す。そしてこの外界の環境との「錯綜」(frustration)を解消しようとする欲求・本能こそ、宗教誕生の根源的な要因である。

こうして上野は、次のごとく結論づける。本能的行動によって適応しきれない環境の変化に対応するものとして、人間には意識が生まれた。この意識の第一の役割は、外界を、既知のものとして未知のものとして判別することにある。さらに人間の意識は、想像を通して未知のものをも解釈し、既知のものとしてきた。だが以上の過程をいくら繰り返しても、未知の部分が残る、外界との不適合・錯綜が完全に解消されることはなかった。そこでこの錯綜からくる「不安」さらには「罪悪感」「不全感」を解消してくれる超自然的な存在が求められるようになった。こうして人間には宗教が発生し、個々の人間に於いても、同様の経緯で外界との「錯綜」を解消する必要に迫られたとき、ここにこれから社会へ出ようとする青年期、そしてさまざまな行動傾向が衰退してゆく中老年期に、「人格の変化」としての「回心」が漸次的な形で生ずることになる。

以上、上野隆誠の描こうとした宗教心理学を駆け足で見てきたが、指摘するまでもなく、その重要な部分を占める「錯綜」説は、Flower, An Approach to the Psychology of Religion, 1927の焼き直しでしかない。そして外界との錯綜から宗教が発生するというフラワーの説自体、一見、客観的・科学的に見えるが、現在のわれわれの目からすれば検証不能な思弁の産物でしかない。

それゆえ上野を批判することは容易い。だが上野の目的は、第一に、欧米のさまざまな宗教心理学説を吸収・消化する中で、日本に宗教心理学の基盤を創ることにあった。そしてこれが一応終了した後に、自分自身の独創的な研究を打ち出すことにあった、とこう見るべきであろう。しかし彼は、心臓弁膜症という自らの健康問題、そして戦時下という制約によって、先へ進むことが阻まれたまま志半ばにして倒れてしまった。

それだけに上野の死から半世紀以上経ったいま、本プロジェクトによって如何なる新しい宗教心理学像が浮かび上がってくるのか、非常に興味深いところであり、またそれこそが彼の果たせなかった意志を継ぐ行為であると思われる。

最後に、彼のより詳細については、拙論「上野隆誠『春と秋のはざままで』」「日本の宗教学説」『東京大学宗教学研究室、1985年を参照いただければ幸いである。

科研費研究プロジェクトに関わっての意見、感想

高木宣行(龍谷大学)

1. はじめに

1-1. 宗教心理学の研究意義について

今回、宗教心理学の体系化は、科研費研究として実施されることになったが、宗教心理学を研究

することの意義について考えさせられることもある。この意義の一つには、心理の全体構造の普遍的知見を研究する際、広義の宗教的心理要素を除外しての分析は充分ではない、ということも挙げられよう。これは宗教心理学研究会の先生方も指摘されていたことである。

人類全体の宗教的行動の起源について、進化的観点から宗教誕生を考察する場合、例えばネアンデルタール人以降の人類にみられる「埋葬行動」が挙げられることがある。現代人においても、たとえ特定教義をもつ宗教とは無縁の人でも、近親者の死に遭遇した場合には何らかの形で葬礼を行うであろう。またその際、様々な観点から死の問題を考えることもあろう。勿論、宗教の射程は死の問題のみではない。このように一般的な社会生活を営む限り、何らかの宗教的行動や心理と無縁の生活は難しいのではないかと、よって心理の全体構造を研究する場合には、広義の宗教的心理の研究も重要ではないか、と思われるのである。

1 - 2 . 宗教心理学の体系化と社会的貢献

今回の科研費研究は、日本でも宗教心理を対象とする研究領域がサイエンスの一分野として認知されるためにも、基盤整備の良い機会になるのではと期待される。今回の研究課題に着眼すると、「宗教心理学の体系化に関する研究 宗教心理学の社会的貢献にむけて」とある。この「体系化」と「社会的貢献」は、学問が社会的認知を得るために必要となるものであろう。但しこれらは、短期的な完成度の追求よりも、多様な立場を尊重しながらの「継続的な試み」が大切となるものと思われる。また広く社会的認知を得るため、一般宗教心理を対象に、普遍的知見を探究するような研究も一層進める必要があるものと思われる。

2 . 科研費研究に関わった意見と感想

私は現在、科研費研究における役割として「データベース化班」、「研究成果報告書作成班」、「文献研究班における"進化と宗教心理学"の部門」に参加させて戴いている。以下にそれらに対する意見、感想等について述べる。

2 - 1 . データベース化班について

以前に班長の先生から、宗教意識調査尺度のデータベース化に関して、質問項目史の研究について提案があったが、本案について私も興味深く思っている。文献整理の段階で調査系研究は抽出可能と思われるが、年度毎に観点を絞る等により研究実施が容易になるものと思われる。

2 - 2 . 文献研究班について

文献レビューの方法については未確定要素もあるが、現在の所はML等にて先生方が概略方向性を示して下さっている。文献研究の内容、特に私の担当については、進化的観点から宗教的心理の誕生等に関して文献をまとめることが課題の一つとなる。例えば、動物が仲間の死体に対して如何なる反応をするか、また表象機能等を含む認知の進化・発達において、眼前にない死者等のイメージが如何に誕生するか等の研究を概観する作業になる。その中で主要語の概念整理や操作的概念規定等も行う必要があるかもしれないが難しい作業ではある。

2 - 3 . 様々な学問分野にふれる

先生方の議論は興味深く、自分でも思想系・調査系など宗教心理学の書籍を閲覧してみた。理解には至っていないが興味深い。また文献研究の過程で、動物行動学、社会生物学、霊長類学、進化心理学、宗教学、宗教人類学、脳科学等の文献も宗教心理の観点から簡単に閲覧してみたが、短期間では手におえない奥深さを感じてい

る。

2-4. 事務書類の一端にふれる

研究代表者の先生は事務量が多く大変ではと思われるが、今回、科研関係の事務書類の一端をみる事ができたことは新鮮な経験であった。私の研究関係の事務経験としては、全国学会の大会事務局や研究室の副手を務めたことはあるが、それらとはまた違って良い経験になった。

3. 今後の展望

科研費研究における宗教心理学の研究課題は多々あると思われるが、今後、優先順位にそった年次計画の設定等が必要となろう。最後に、科研費研究に参加させて戴いての何よりの収穫は、先生方から様々な研究の話に接することができたことである。今後ご教示戴くことがあれば幸いである。

科研費研究プロジェクトに参加して

中野美加(神戸女学院大学大学院)

昨年、第2回ワークショップの後、筆者は宗教心理学研究会に加えていただいた。そして現在、修士の学生でしかも会員としての日も浅いまま、科研費プロジェクトに参加させていただいている。最初、科研費プロジェクトへの参加の呼びかけがあった時、「宗教心理学に科研費がおりるかもしれない!？」と感激して、もしおいたら面白い研究に加えていただけるのではないかと思い、修論の年である事も深く考えず応募した。

関係者の方々のご努力の結果、プロジェクトは通過し現在に至っているわけだが、その第1回企画会議の席上で、金見先生が「このテーマに科研費がおりるのは10年前には考えられない事」と発言され、記念的なプロジェクトに参加させていただくことができた幸運と責任を感じた。しかしながら、いざスタートしてみると間もなくして、筆者自身は一体何をやればいいのかも、目的すらも、漠然としたまま参加している事に気づかされた。参加する事に意義がある、とは思えず、何がしかの成果を私なりに挙げなければならぬだろうと不安になった。プロジェクトの研究課題は「宗教心理学の体系化に関する研究 宗教心理

学の社会的貢献に向けて」である。ということからは、当初から示されていたのでプロジェクトの目的を頭では理解し、参加動機も一応高かったつもりだ。しかし、メーリングリスト上で繰り返された、いろんな立場の研究者の方たちの貴重な論戦にはほとんどついていけず、呆然となった。夏休みも中盤にさしかかり、ようやくうすばんやり見えてきた輪郭の端っこあたりをカリカリ引っかきはじめてたところである。

筆者自身はSpiritualityと宗教性の関係に関心をもっており、今回の企画の目的では、そこに一番ひかれた。特に日本では宗教性とspiritualityを引き離して論じられる事が多いようで、spiritualityの定義もあいまいなまま、釈然としないものを感じていた。もっとも、「宗教」に拒絶反応を起こす人が多いらしい日本では、致し方ないことなのかもしれないが、本当に多くの人が宗教を拒絶しているのだろうか。確かに21世紀の日本では、特定の宗教とは離れた次元で、人がよみがえり、あるいは異界を訪ねる映画が作られ、人々に受け容れられている(『千と千尋の神隠し』2001; 『黄泉がえり』2003etc.)。宗教について

問われると「無宗教です」と答える日本人は多いが、特定の宗教は標榜しないものの、人のよみがえりや異界、霊界など超自然的なものに興味を抱くこと自体、その人の宗教性を表しているのではないだろうか。特定の宗教性をもたない事イコール宗教性がない事ではない。

では、多くの日本人が有している「隠れた」宗教性があるとしたら、それはどういうものなのか、それを仮にspiritualityと呼んでしまってよいもの

だろうか、それならspiritualityに当てはまる日本語は、「宗教性」でOKなのか、等々、ありがたい事に疑問は山積している。宗教心理学の定義はよく知らないが、筆者は「宗教性を通し隣り人の意識と行動を研究する学問領域」とであると理解している。隣り人を理解し共生するためにも、宗教心理学を研究していきたいと、切に願っている。

事務局からのお知らせ

昨年度と同様に研究発表会に合わせまして、宗教心理学研究会ニューズレター第4号が発行されました。今回の内容は、「科研費研究プロジェクト」に関わった会員の方々にそれぞれの思いや考えていることを執筆していただきました。

宗教心理学研究会が発足して丸2年が経ちました。10月中旬には、公開研究発表会、その後、科研費研究プロジェクトの総括と続いております。今後も会員の皆さまのご理解とご協力をいただきながら、様々な研究会活動のお手伝いをさせていただきたいと思っております。 (K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2005年10月

第3回科研費研究プロジェクト企画会議 [於:南山大学]

公開研究発表会『宗教心理学的研究の現在』[於:南山大学]

2005年11月～12月

宗教心理学研究会ニューズレター第5号の原稿依頼

第4回研究発表会(日本心理学会第70回大会ワークショップ) テーマ・発表者の提案・検討

2006年1月

宗教心理学研究会ニューズレター第5号の構成・編集作業

日本心理学会第70回大会ワークショップ申し込み

公開研究発表会「宗教心理学的研究の現在」のお知らせ

公開研究発表会を下記のように開催いたします。どなたでもご参加いただけます。お近くに報告テーマに関心をお持ちの方がおられましたら、お声をかけていただければ幸いです。多数のご参加をお待ちしております。

日時 2005年10月16日(日) 13:00～17:00

会場 南山大学 名古屋キャンパス DB1教室(人間関係研究センター)

プログラム

司会 安藤泰至(鳥取大学)

研究発表 13:00～15:00

「子どもを取り巻く宗教的環境 エコロジカル・モデルの視点から」

西脇 良(南山大学)

「真光における調査三態 - 質的・量的方法の併用 -」

杉山幸子(八戸短期大学)

指定討論&フロア討論 15:00～17:00

「心理学の立場より」 金児暁嗣(大阪市立大学) 加藤 司(東洋大学)

「教育学の立場より」 ミカエル・カルマノ(南山大学)

「宗教学の立場より」 渡辺 学(南山大学)

発行: 宗教心理学研究会

編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望[kobo@yf6.so-net.ne.jp]

研究会ホームページおよびメーリングリスト管理・運営

担当: 西脇 良[rnishiwk@ps.nanzan-u.ac.jp]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/